



TITLE:

京大広報 No. 648

AUTHOR(S):

京都大学総務部広報課

CITATION:

京都大学総務部広報課. 京大広報 No. 648. 京大広報 2009, 648: 2977-2996

ISSUE DATE:

2009-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196436>

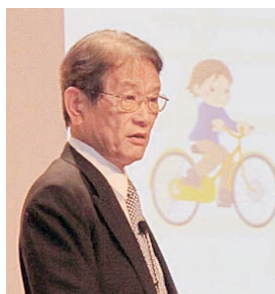
RIGHT:



京大広報

No. 648

2009.9



京都大学オープンキャンパス2009
—関連記事 本文2982ページ—

目次

本学の国際化拠点大学構想 K.U.PROFILE の概要と意義 副理事・国際交流推進機構長 森 純一	2978
〈大学の動き〉	
第10回APRU博士課程学生会議を開催	2980
広報倫理講習会および広報担当者連絡会を開催	2981
「京都大学 東京オフィス」を開設	2981
「京都大学オープンキャンパス2009」を開催	2982
〈寸言〉	
“超交流”のススメ 今村 元一	2983
〈随想〉	
上海の過去、現在と日本 名誉教授 上原 一慶	2984
〈洛書〉	
研究を取り巻く多くの目 田中 正之	2985
〈荣誉〉	
富谷 至人文科学研究所教授が北極星勲章 コマンデール章を受章	2986

禰津家久工学研究科教授が国際水理学会 Yalin 賞を受賞	2986
〈話題〉	
創立記念行事音楽会を開催	2987
松本 紘総長がAPRU第13回年次学長会議に出席	2988
JSPS—MOE コーディネーター会議を開催	2988
第12回「高校生のための化学」を開催	2989
教育実践コラボレーション・センター公開シンポジウム 「日韓の教育改革の行方」を開催	2989
IDE 大学協会近畿支部 IDE 大学セミナーを開催	2990
〈日誌〉	2990
〈訃報〉	2991
〈公開講座〉	
平成21年度京都大学森林科学公開講座	2992
教育学研究科附属臨床教育実践研究センター 公開講座「拒食症と現代のライフスタイル」	2993
〈お知らせ〉	
無料法律相談のお知らせ	2993
〈隔地施設紹介〉	
生存圏研究所信楽 MU 観測所	2994

京都大学総務部広報課

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

本学の国際化拠点大学構想 K.U.PROFILE の概要と意義

副理事・国際交流推進機構長

森 純一

私は本年4月より副理事・国際交流推進機構長に就任しました。国際交流推進機構の業務は、本学の国際交流の企画立案、国際的大学連合などを通じた戦略的かつ多面的交流、外国人留学生や外国人研究者の受入環境整備、国際交流担当職員の育成などです。

昨年の7月、政府は閣議で「留学生30万人計画」の実施を決定し、本年4月に拠点となる大学を公募しました。公募の結果、京都大学を含む全国13の「国際化拠点大学」が選定されました。

国際化拠点大学としての取組みは、多くの学部や研究科の協力が必要な全学的なプロジェクトであり、国際(教育)担当理事の西村周三副学長を構想責任者とし、国際交流推進機構が全学の実施部局の取りまとめを行うこととなりました。本稿では「留学生30万人計画」に対する本学の構想の概要を書くことに致します。

1. K.U.PROFILE とは

本学の構想の日本語名は「地球社会次世代リーダー育成プログラム」とし、英語名の Kyoto University Programs for Future International Leaders の頭文字をとって「K.U.PROFILE(ケーユープロファイル)」を略称としました。ウェブページの K.U.PROFILE のロゴは国際的リーダーをイメージして、作成されました。



K.U.PROFILE の目標は、本学の持つ世界最先端の独創的な研究資源を活かし、アジア、アフリカ、欧



米からの留学生を集め、地球社会の現代的な課題に挑戦するリーダーを育成する教育です。

K.U.PROFILE は、大きく分けて次の三つの柱から成り立っています。

第一の柱は、英語で学位の取れ

るコースの設置です。英語で学位の取れるコースについては、1学部と8研究科に設置を計画しています。学部では工学部地球工学系に「国際コース」を設けます。現在、英語コースのためのカリキュラム設定、教材作成や教員採用が進められています。併せて、全学的に海外大学との遠隔講義の拡充が図られています。

第二の柱は、国内における留学生受入環境の整備です。留学生宿舍の増設、秋季入学制度の導入、経済的支援の強化、日本人教員の英語による教育力の強化などがあります。実施部局には、留学生受入事務や支援強化のために、英語に堪能な職員を配置します。

第三の柱は、留学生受入に関する海外での取組みです。海外の高校卒業試験の成績利用や、英語での入試、遠隔会議システムを利用した遠隔面接の導入、海外同窓会を活用しての学生募集などを検討しています。重点受入国としてエジプト、ベトナム、中国を設定しました。このうちベトナムには他大学も学生募集に利用できる共同利用拠点を設置する予定です。

K.U.PROFILE では、数値目標が設定されています。平成21年5月時点で本学には1430人の留学生が在籍していますが、これを平成25年には2100人強に増やし、平成32年には3200人にすることを目標としています。また、現在、5%強の留学生比率を14%

まで引き上げることが目標です。なお、この留学生数について留意すべき点は、従来留学生数に含めなかった短期で受け入れる海外大学の学生もカウントすることです。

K.U.PROFILE は、留学生に対する教育のみでなく、日本人学生など非留学生の国際体験を促進することも重要な目標としています。そのため、短期を含め、交換留学での派遣、学部生の国際交流科目での派遣や大学院生の派遣など、より多くの学生を海外に派遣することを推進する必要があります。

2. 第Ⅱ期中期目標・中期計画と K.U.PROFILE

来年度より実施される京都大学の第Ⅱ期中期目標・中期計画には「教育の国際化」が明示されることとなりました。第一の目標として「学生海外派遣制度を充実させるとともに、留学生受入体制を強化する」ことが、また第二の目標として「学部・研究科等の特性を活かした多言語教育を充実させるとともに、国際的な情報発信を強化する」ことを挙げています。K.U.PROFILE は、第Ⅱ期中期目標・中期計画に明示的に盛り込まれた「教育の国際化」の中核的な部分を担うことになります。

K.U.PROFILE は、これまでの京都大学の国際化の延長線上にあります。英語での講義は多くの大学院で行われてきましたし、学部では交換留学生と正規学生を対象に KUINEP 講義と呼ばれる英語での講義を提供してきました。短期学生についても、大学院では特別研究学生としての受入が行われてきました。学部では国際交流科目として、多数の海外大学との交流が行われており、遠隔講義も総合人間学部での台湾大学との生命科学や情報学での講義、地球環境学堂の清華大学・マラヤ大学との講義など多くの実績があります。

K.U.PROFILE は、従来から京都大学で行われてきた教育の国際化を体系化し、より強化していく取組みと言えます。留学生の増加と国際的取組みの質的向上を目指して、約30名の外国人教員の採用が見

込まれています。短期学生受入を増やすために、より柔軟な短期受入を可能とする枠組み作りも課題です。

松本 紘総長は、K.U.PROFILE の準備のための議論のなかで「外国人留学生・研究者が来て違和感のないキャンパス」を作りたいと述べられました。その実現の一環として、これまで諸手続きに関する書類の多くが日本語のみで作成されていましたが、現在、書類の英文化に取り組んでいます。国際空港のようにとは言わないまでも、日本語が十分でない留学生が来た時に不便や違和感を覚えないように、キャンパスを新しい視点で見直すことも大切な仕事です。

K.U.PROFILE は、予算が5年間に限定されたプロジェクトです。この限られた期間に多くのことを成し遂げ、外部からの予算が切れた後も、本学が国際化への取組みに自助努力できることを見定めていく必要があります。

今後、追加的な英語コースや短期の学生受入派遣の実施の計画が生じた場合には、学内において支援の可能性もありますので、ぜひご相談いただきたいと存じます。

さて、最後になりましたが、K.U.PROFILE の採択に至るまでには、忙しいスケジュールで、多くの部局の皆様には大変にご迷惑をおかけしました。紙面をお借りしまして、改めてお礼とお詫びを申し上げます。

京都大学はその歴史の初めから、多数の国際的な経験を積み重ねてきました。K.U.PROFILE は、この延長線上にあるプロジェクトです。全学の英知を結集し、長い経験と新しいチャレンジを融合した取組みにより、本学はより一層世界に開かれ、世界からより一層信頼される大学となっていくことを確信しています。

大学の動き

第10回 APRU 博士課程学生会議を開催

APRU(環太平洋大学協会)は、環太平洋圏の16カ国・地域42大学の加盟校からなる世界有数の大学連合で、年間を通じて世界各地の加盟校で様々な分野の会議やシンポジウムを開催している。そのうちのひとつである博士課程学生会議は、研究分野を問わず様々な研究にふれることで見識を広め、また、国際的な交流を図ることを目的としている。

このたび、記念すべき第10回会議が7月6日(月)～10日(金)の間、本学主催で百周年時計台記念館において開催され、26大学、約100名の大学院生が参加した。



熱気あふれるセッションの様子

松本 紘総長の挨拶、松沢哲郎霊長類研究所長による「チンパンジーの知性」と題する基調講演で幕を開け、午後には、今回のテーマである“Promoting Originality and Diversity in Research”についてグループディスカッションを行い、最終日のプレゼンテーションコンテストに向け、熱く意見が交わされた。

翌日からの三日間は、各自が多岐に渡る研究テーマで口頭発表を行った。文化、社会的背景はもとより、異なった専門分野の者同士が情報交換や交流を深める場となり、「他分野の研究発表を聞ける機会は少ないので刺激を受けた」、「探求心や知の交換の貴重な経験となった」などの声から寄せられた。

また、セッションの他にも二日間のソーシャルプログラムが行われ、1日目は本学学生の協力の下、清風荘での茶道体験、書道部の指導による書道体験などのグループに分かれての日本文化体験、2日目は花山天文台、生存圏研究所、防災研究所に分かれての見学を実施した。この間、レセプションでは、本学能楽部金剛会による仕舞披露があり、日本の伝統文化と最先端技術に直接触れた体験が、今後の研究にも活かされることが期待される。



レセプションでの能鑑賞

最終日の久保田 信准教授(フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所)の基調講演では、自ら歌唱披露の「ベニクラゲ音頭」に参加者も手拍子で盛り上がり、和やかな空気の中、今後の健闘と再会を誓いあいながら閉会した。



参加者集合写真

(国際部)

広報倫理講習会および広報担当者連絡会を開催

7月31日(金)、寺本振透東京大学大学院法学政治学研究科教授(弁護士)を講師に迎え、広報倫理講習会を開催した。はじめに稲葉カヨ広報委員会広報倫理専門部会長より開会の挨拶があり、引き続き寺本



講演中の寺本教授

教授から、広報活動を行うにあたり注意しなければならない点を「京都大学広報倫理ガイドライン」をとおしてわかりやすく

説明された。著作物や情報など様々な面で「リスペクト」がキーワードであり、良識に従い、他者に対する「リスペクト」を堅持すれば大きな失敗は避けられるとい

う話に、参加者は真剣な面持ちで耳を傾けていた。

同講習会終了後、引き続いて広報担当者連絡会が行われ、広報課から報道対応や広報誌・ホームページへの情報提供に対する注意点について説明があり、広報活動に関する協力要請が行われた。

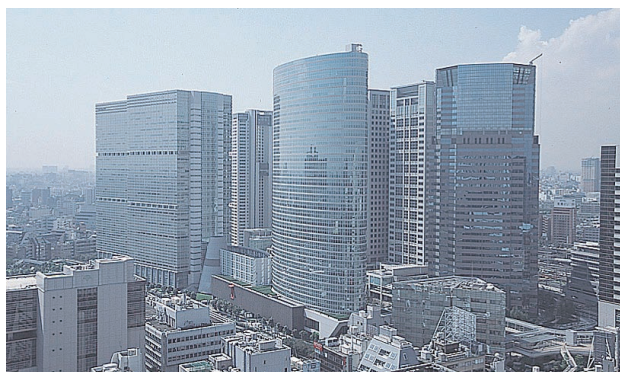


熱心に耳を傾ける参加者たち

(総務部)

「京都大学 東京オフィス」を開設

本学の東京地区における情報収集および発信の拠点として、社会との連携および同窓生との交流を図り、本学における研究教育の推進および社会貢献に寄与することを目的として、本年9月に「京都大学東京オフィス」を開設した。



東京オフィスが開設された品川インターシティA棟(写真中央)

開館時間中は、ラウンジ・ミニラウンジ・ワークスペース(インターネット接続可能)が自由に利用可能であるが、会議室の利用には予約が必要である。

本学教職員(元教職員含む)、本学学生、本学卒業生ほか関係者の方にご利用いただきたい。場所・開館時間等は以下のとおりとなっている。施設の詳細および予約方法等については、京都大学東京オフィスのホームページに掲載されている。

開館時間：月曜日～日曜日 午前10時～午後8時
問合せ先：〒108-6027 東京都港区港南2-15-1
品川インターシティ A 棟27階

TEL：03-5479-2220 FAX：03-5479-2221
<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/tokyo-office>

(総務部)

「京都大学オープンキャンパス2009」を開催

京都大学オープンキャンパス「魅力・活力・実力 明日をつくる京大」が8月6日(木)・7日(金)の両日、全国各地から高校生、保護者など約1万2百人の参加のもと開催された。

今年で8回目を迎えるオープンキャンパスは、初日を総合人間学部・文学部・教育学部・法学部および経済学部の文系5学部、2日目は理学部・医学部・薬学部・工学部および農学部の理系5学部に分けて実施した。

オープニングセレモニーは、両日とも百周年記念ホールで行われた。中原俊隆オープンキャンパス委員会委員長の司会進行により、はじめに西村周三理事・副



歓迎の挨拶をする西村理事・副学長

学長から「ようこそ、オープンキャンパスへ」と歓迎の挨拶があり、続いて松本 紘総長から「京都大学をどうぞみなさんへ」と題して、京都大学の現在までの歩みと未来についての講演があった。

その後、京都大学応援団による力強い演舞とユーモアを交えた受験合格への熱いエールが送られ、参加者から盛大な拍手が沸き起った。最後に在学生からのメッセージと題して、初日は教育学部4年の川口文佳さんと薬学部4年の鮎川公美子さんが、2日目は同じく鮎川さんと教育学部3年の佐藤 映さんが、それぞれ自らの受験体験や本学の自由の学風について熱く語り、オープニングセレモニーは閉会した。

午後には、二つの講演会と一つの発表会が催された。「京大教員による講演会」では、初日は人間・環境学研究科の阿辻哲次教授と薬学研究科の伊藤美千穂准教授が、2日目は法学研究科の高山佳奈子教授と人間・環境学研究科の新宮一成教授が講演され、各教員の興味深い研究内容の紹介と語りに、聴衆は熱心に聞き入っていた。次に「京都大学で環境問題に挑む!」と題して、環境保全センター関係者が本学における環境配慮の取り組みや研究、学生の取り組みなどについて紹介した。

その後、新企画となる「在学生によるサークル紹介」では、雪だるまプロ(自主映画制作サークル)・京大グリークラブ(男声合唱サークル)・Juggling Donuts(ジャグリングサークル)・京都大学体育会居合道部・京大落語研究会(落語サークル)・彩京前線(ダンスサークル)などが日頃の練習の成果を披露した。

百周年時計台記念館国際交流ホールでは、入試・学生生活・就職・留学・キャンパスライフ・環境の相談コーナーが開設され、高校生や保護者からの相談や質問に職員や在学生が答えた。また、同ホールでは、参加者と在学生が受験勉強や学生生活に関する様々なことを親しく語り合う在学生交流コーナーが設けられ、両日とも大勢の参加者で賑わい、熱気溢れる中にも和やかな交流風景が見られた。

また、在学生が案内するキャンパスツアーも好評で、猛暑のなか説明に耳を傾け、元気に歩き回る光景が、構内のあちらこちらで見られた。

学部説明会では、学部長の歓迎の挨拶や模擬講義、施設見学、研究室訪問、相談コーナー等が実施された。各会場では、多くの参加者が真剣な表情で説明に聞き入り、関心の高さがうかがえた。総合人間学部と文学部は、参加定員を設けない自由参加制で実施し、両学部とも多くの参加者で賑わった。

学部説明会終了後も、参加者はそれぞれ大学構内を自由に散策し、附属図書館・総合博物館・歴史展示ホールなどの施設見学への参加、京大グッズの購入、記念撮影をする姿が多く見られ、活気に溢れる二日間であった。



応援団による演舞

(学生部)

寸言

“超交流”のススメ

今村 元一

新聞が「鉄道や航空機には乗らない方がよい(“2000年問題”でコンピュータが誤作動する)」などと騒いでいた2000年の新春、私は下鴨の下宿にこもって『修士論文』と『会社設立準備』に没頭していた。

工学部建築学科(93年入学)にもかかわらず、気が付けばインターネットの魅力に取り付かれて、研究室のサーバをいじる毎日。大学院時代(情報学研究科98年進学)も、企業から受注したソフトウェアを開発する日々だった。結局、たったの一度も就職活動を経験する事なく、2000年4月に自身最初のベンチャー(四次元データ：現シナジーマーケティング[証3859])を立ち上げるに至ったのだが、よくぞこんな“学業を疎かにする学生”を在学させて下さっていたと、今でも恩師と母校に深く感謝している。

社会に出てわずか10年の若造が“偉そうな振り返り”を書くに躊躇^{ためら}われるが、今日までの私の事業活動は「京大での学生生活」にその礎を置いている様に感じる。すなわち、時計台半径1キロ内での喜怒哀楽の中に多くの仲間を得た事に始まり、その仲間がいたからこそ多くに挑戦して来られたのだと思う。

「経営資源はヒト・モノ・カネ」と言う無機質なセリフはしばしば耳にするが、商材や設備(モノ)、資金(カネ)と比べて、苦楽を共にする仲間(ヒト)は特に得難い資源だと思う。何をするにしても、良い時もあるが、必ず“悪い時”がある。一人で乗り越えられる事など、たかが知れている。

以降年々、益々多くの人との交流を願うようになった。挙句、この7月には情報学研究科同窓生を核とする「超交流会2009」なるイベントを企画した。広く一般社会人や一般学生にも参加いただく交流イベントだ。特定の政策提言や学術振興を図るものではない。目的は「交流」そのものにある。

総じて日本人は「新しい協力関係を構築する事」に不得手だと思うが(日本の歴史に新産業創造事例が少ない事もそれを裏付けていると、勝手に思っている)、“同窓生中心”と言うだけで、不思議と人的ネ



「超交流会2009」の様子

ットワークの構築が促進されたように思う。180人が一堂に会した様子は動画公開(※)されているので、ぜひ参照して頂きたい。

※ <http://www.johogaku.net/> ←「超交流会」で検索
この会に限らず、人とのつながりは大切にしたい。相互に、(A)何が出来るのか？[What I can]、(B)何を望むのか？[What I want]、の情報を共有しあえば、そこに“人生を豊かにする何か”が生まれると信じる。

私自身は今、ビジネスソフト開発ベンチャー(※)のCEOをしている。(※クエストトラ <http://store.questetra.com/>)

- ・成果物 QCD(品質コスト納期)の担保や
- ・高業績者知識(ナレッジ)共有

を推進すべく、ビジネスプロセス(ワークフロー)の可視化とその管理を行う「プロセス洗練ソフト」を世界販売している。BPM(Business Process Management)なる新しいカテゴリだけに未だ認知度は低いですが、この活動を通じて、日本のビジネスソフト産業を活性化したいと考えている。もう少し戯言を言えば、1兆円以上を輸入し100億円程度しか輸出できていない日本のビジネスソフト産業を輸出超過に転じせたいと、本気で考えている。

ただこの事業は、当然10人や100人では実現しない。もっと広く協力関係を構築しなければならない。世界中にももっと協力者を見つけなければならない。本稿を書いて、改めて思う。

学生時代に、もっともっともっと沢山の仲間を作っていれば良かった、と。

(いまむら げんいち 株式会社クエストトラ 代表執行役 CEO 平成9年3月工学部卒業 平成12年3月情報学研究科修士課程修了)

随想

上海の過去、現在と日本

上原 一慶



1981年12月から2007年3月まで、四半世紀以上を経済研究所で、中国経済の現状をテーマに研究してきた。1984年11月から85年8月まで文部省在外研究員として、上海社会科学院に留学する機会を得たことが、研究方向を決めたと言っている。その後、たびたび中国を訪問したが、その度にその変化に驚かされてきた。ここでは、1978年11月の改革開放から間もない、なお市場経済化を模索していた留学時期に経験した驚きと、昨年(2008年11月)、現在の赴任先である大阪商業大学比較地域研究所主催の国際会議(2009年10月31日予定)打ち合わせのために上海を訪れた時に味わった驚きを紹介することで中国の変化をみると同時に、その比較で日本の現状について感じることを述べてみたい。

上海での最初の驚きは、私が居候していた上海外国語学院専科楼近くの中山公園バス停での出来事である。上海社会科学院は淮海路にあったが近くに宿舎がないとかで、遠く離れた上海外国語学院専科楼に間借りすることになり、中山公園のバス停から蘇州河を渡って淮海路まで毎日通うことになった。その初日である。バス停付近には思ったほど人を見かけず、これならゆっくり座って通えると思い、丁度私の前に停車したバスのステップに足をかけたその時である。どこからともなく現れた大勢の人がバスのステップに殺到し、私を押しつけ、我先に乗ろうとし出した。私も負けまいと争いに参加したものの、肘で押しやられ、最後に押しやられ呆然としているとバスは私を残して出発してしまった。

もう一つの驚きは、上海復旦大学の助手をしていた友人の家に招待された時のことである。彼が経済研究所に数量経済学の勉強で留学した時以来のつき

あいである。彼の家は、2階建て長屋が何棟も並んだ労働者街の一区画(1階、土間、炊事場、2階、寝室)で、親子4人暮らしにはあまりにも貧弱であった。それ以上に参ったのは、トイレが共同であったことである。酒をごちそうになりトイレに行ったが、あまりのすごさに出るものも出なくなった。この時の上海は、モラルの低さと経済の貧困を端的に示していたように思う。

昨年11月の上海では、いつも乗客が多い地下鉄で、押し合いがなかったし、老人、身障者を見つけると席を譲る光景に出会った。一方、上海の友人は、その後、助教授、教授へと昇進する度に転居し、その度に広いマンションに住めるようになったと語っていたが、今度招いてくれた住まいは、浦東の高級住宅地に建つ高級マンションだった。広々とした居間、応接間、そして勉強部屋等々、確かに広い。子供2人はもう自立し、老夫婦2人には大きすぎるのではなどとやっかみ半分で観察していたが、何よりも驚いたことはトイレが二つあることだった。

こうした上海の変化は、北京五輪や上海万博で押し寄せる外国人対策に過ぎず、しばらく経てば元に戻るかもしれない。また中国の経済発展は格差拡大をもたらしているし、その発展は50%を超える非正規就業による不安定な発展であることを見逃せない。したがってこれらの変化を過大にみることはできない。ただ日本に目を転じた時、考えさせられることが多い。第1は、東大阪にある大阪商業大学に通うようになってから、毎日、大阪駅から京都行き新快速で帰るが、その時の光景は、25年前の中山公園前のバス停と変わらない。第2に、中国政府は派遣労働者に対して、2008年1月以来、同一労働同一賃金を決め、不安定要因の除去につとめた。これに対して、3人に1人が非正規就業者となっている日本では未だそれを打ち出せないでいる。上海、中国の変化と比較すると、日本人のモラルの低下、日本の政策の貧困が目につくのは私だけだろうか。

(うへはら かずよし 平成19年退職 元経済研究所教授、専門は中国経済論)

洛書

研究を取り巻く多くの目

田中 正之

昨年(2008年)4月に野生動物研究センターが創設された。私は京都市動物園に常駐して研究をおこなう教員として着任した。京都に来て、研究を取り巻く多くのさまざまな目があることを知った。これまでの経過を書きたいと思う。



研究の現場となる動物園は京都市の施設であり、研究対象となる動物は動物園の飼育動物である。飼育担当者にとっては、大事な「わが子」を預けるのだから、厳しい目で研究が見られることを覚悟せねばならない。また、動物園での研究は入園者の方の目も意識しなければならない。

最初に研究を始めたのはテナガザルとマンドリルを飼育している「サル舎」だった。柵で囲った職員用の通路にタッチモニターやパソコンなどを持ちこみ、タッチモニターを触らせる訓練を始めた。来園者とは柵で隔てられるものの、目の前で実験をすることになる。まったく無視するのも無愛想すぎるが、通り過ぎる人にいちいち説明しては仕事にならない。結局、声をかけられれば答えられる範囲で答えるが、基本的には実験に専念させてもらうことにした。その代わり、研究の内容をできるだけ平易に説明した掲示パネルを作って柵に掛けた。実験中に見ている人の話し声を聞いていると、読んでくれる人も多いようだ。説明をすることで興味を持ってくれる人がいることもわかった。

動物園で研究を始めて1年後、2009年4月に改修工事をおこなっていたチンパンジーの「学習室」が完成し、チンパンジーの認知研究を始めた。学習室は右の写真のようなガラス張りの部屋である。ここでチンパンジーが学習をするところを公開するというのが、改修のひとつの目玉だった。チンパンジーはこれまで認知実験の経験などない大人が4人。だが心配はしていなかった。前年度に始めていたテナガザルとマンドリルでの経験が生きた。要は、彼らが

警戒を解き、興味をもって近づいてきてくれるのを待つだけだからだ。食物を報酬として使うが、動物園の動物は食餌制限などされていないから、怪しいものに近づいてまで食物を得ようとはしない。実際に、待つこと2週間でマンドリルはやってきた。テナガザルは3か月かかったが、自分から装置に近づいてきた。彼らには今も研究に参加してもらっている。

同じことをチンパンジーにもすればいいと思っていたのだが、期待は良い方に裏切られた。「学習室」に入れるようになるや否や、みんな興味をもって装置に近づいてきたのだ。まさか4人全員がやる気を見せるとは思っていなかったのだから、学習用の装置は2人分しか設置していなかった。すると、その2人分の席をめぐって、さまざまな駆け引きが見られるようになった。これが実に面白い。学習そのものは個人個人のレベルで進んでいくが、4人のチンパンジーが見せるやりとりこそ、チンパンジー本来の姿だと思える。この様子を動物園職員の方にも、市民の方にも、また研究者仲間や学生たちにも見てもらいたいと思っている。



学習中のチンパンジー：京都市動物園類人猿舎

動物園での研究は、動物たちの本来の行動や認知能力を対象にしたいと思っている。むしろ研究を通して、動物本来の行動が引き出せるようになれば、動物園でおこなう研究の意義にも通じるだろう。同じような思いをもって動物園の動物を研究したいという人が、今後増えてほしいと願っている。

(たなか まさゆき 野生動物研究センター准教授、専門は比較認知科学)

栄誉

富谷 至人文科学研究所教授が北極星勲章コマンデール章(Commander of the Royal Order of the Polar Star)を受章

このたび、富谷 至人文科学研究所教授が北極星勲章コマンデール章を授与され、授章式は、7月6日にスウェーデン大使館で執り行われた。

富谷 至教授は、昭和50年3月京都大学文学部を卒業、同54年3月同大学大学院文学研究科博士後期課程を中退し、同年4月同大学人文科学研究所助手に採用、同60年10月大阪大学教養部講師、平成2年4月京都大学人文科学研究所助教授、同9年3月文学博士の学位を取得、同12年4月京都大学人文科学研究所教授となり、現在に至っている。

今回の受章は、スウェーデン王立アカデミー、ストックホルム大学、スウェーデン国立民族学博物館と学術共同研究を進めてきたことに因る。具体的には、20世紀初頭にスウェーデンの著名な探検家スウェン・ヘディンが中央アジア楼蘭遺跡から将来した木簡、紙文書(3世紀から5世紀)の研究と、東アジア



ア、中国、日本、韓国、インド、ネパールの死刑に関する制度史、思想、民族学、社会学の方面からの研究を遂行し、それらの成

果として、『流沙出土の文字資料』(京都大学学術出版会)、『東アジアの死刑』(同出版会)を出版した。また、駐日スウェーデン大使館において、これらをテーマにしたシンポジウムを2回にわたり開催し、人文科学の発展、スウェーデンと日本の学術交流に多大な業績をおさめ貢献した。

北極星勲章は、スウェーデン王国に政治、経済、学術、芸術文化の面で貢献した外国人に贈られる名誉ある勲章であり、これらの業績が認められ、今回、同王国から贈られたものである。

(人文科学研究所)



北極星勲章コマンデール章

禰津家久工学研究科教授が国際水理学会(IAHR)Yalin 賞を受賞

このたび、禰津家久工学研究科教授が国際水理学会(International Association of Hydraulic Engineering and Research, 略称 IAHR)の大賞である Yalin 賞を受賞した。本受賞は、世界で二人目である。

IAHR は、1935(昭和10)年に欧米の研究者が発起人となり設立された。現在では最も権威と伝統のある世界学会に成長している水理学・水文学・河川工学・海岸工学などの水理工学分野の国際学会(本



部事務局はマドリッド)である。これまで IAHR での最高賞は Ippen 賞(Ippen は故 MIT 教授で水理学者)で、45歳以下の若手を対象とした、いわば研究者の登竜門的な賞であった。日本人の受賞者はまだいない。



Yalin 賞表彰状

その後、2006(平成18)年に IAHR の創設70周年を記念して、年齢制限を設けない IAHR 大賞となる Yalin 賞(土砂水理学者の故 Yalin 教授の名前にちなんだもので、正式名を「IAHR M. Selim Yalin Lifetime Achievement Award」)の設置がニースの理事会で決定され、水理水工学の教育・研究に大きく貢献した研究者に授賞することになった。国際水理学会世界大会 Congress は2年に一度開催され、この席上で表彰される。第1回目の Yalin 賞は2007(平成19)年開催の第32回 IAHR ベニス大会においてイリノイ大学の Parker 教授に授与された。同教授は世界的な土砂水理学者である。

そして今回、8月カナダ・バンクーバー開催の第33回 IAHR 世界大会の中で第2回目の授賞式が行われ、欄津教授が Yalin 賞を授与された。同教授の乱流研究は、世界的に高く評価されているが、特に、開水路乱流力学の進展と学生・若手研究者への教育普及に多大な貢献を行ったことが受賞理由である。同教授の著書である IAHR 専門書「Turbulence in Open Channel Flows (開水路乱流)」(オランダのバルケマ出版)1993(平成5)年初版は、多くの論文

で引用され、現在でも国内外の大学院で標準的な教科書になっている。研究面では、世界最先端の流体計測機器を駆使して、難解な組織乱流構造を解明しており、本学の高精度な水理実験装置の整備・拡充に寄与し、これを世界最高レベルの研究施設に育てている。今回、世界で二人目となる Yalin 賞の受賞は、本学の水理水工学のレベルの高さを示すものであり、本学にとっても名誉なことと思われる。

なお、欄津教授の略歴は以下のとおりである。昭和46年卒業式京都大学工学部総代、同51年同工学研究科博士課程修了後、本学工学部助手、同54年同講師、同56年同助教授、平成8年同教授に昇任し、現在に至っている。1976(昭和51)年に土木学会論文賞、1987(昭和62)年にアメリカ土木学会論文賞(Karl Emil Hilgard Prize)、1998(平成10)年に国際水理学会アジア太平洋最優秀論文賞(IAHR-APD 賞)を受賞しており、今回2009(平成21)年の Yalin 賞で奇しくもちょうど11年周期で各分野の大賞を受賞したことになる。

(大学院工学研究科)

話題

創立記念行事音楽会を開催

6月18日の本学創立記念日を祝し、第53回京都大学創立記念行事音楽会「山下洋輔〜クラシックとジャズ〜」が6月17日に京都コンサートホールで開催された。

今回、出演された山下洋輔氏は、1969年にトリオ結成以来40周年の節目の年ということもあり、往年の曲から最新アルバムの曲、そしてクラシックの名曲からジャズの定番までトークを交えながらパワフルに演奏し、約1,200名の聴衆は大いに盛り上がりとともに、熱い余韻が残る音楽会となった。



演奏中の山下洋輔氏

(学生部)

松本 紘総長がAPRU第13回年次学長会議に出席

松本 紘総長は、6月28日～30日にアメリカ合衆国パサデナ市のカリフォルニア工科大学で開催されたAPRU(環太平洋大学協会)第13回年次学長会議に、森 純一国際交流推進機構長、小寺秀俊総長室長、竹安邦夫教授(国際交流委員会小委員長・生命科学研究所教授)およびエイズリー・ケア特定職員(国際交流課)とともに出席した。この会議には、APRU加盟大学から31大学の学長ほか関係者約100名が参加した。

この中で、APRU プレジデント・オープン・フォーラムでは松本総長が“Working toward solutions that ensure the ‘survivability’ of humans on the planet Earth – thinking beyond ‘sustainability’”と



APRU プレジデント・オープン・フォーラム

題して講演を行い、サステナビリティを超えたサバイバビリティの必要性を訴えた。

また、APRU ビジネスミーティングにおいて、松本総長がAPRU Steering Committee(理事会)の日本代表のメンバーに選出され、今後、活動方針等を審議する理事の一員として積極的な役割を期待されることになる。

また、APRU World Institute の理事会が併せて開催され、松本総長は理事として出席した。

今回の会議出席に併せてサンフランシスコでは、総長と本学同窓生による北カリフォルニア洛友会会員との懇談会が開かれ、当地を中心に活躍中の同窓生と親しく交歓した。



加盟校学長

(国際部)

JSPS-MOE コーディネーター会議を開催

工学研究科で実施しているJSPS拠点大学交流事業「都市環境」に関連し、7月6日(月)、清華大学(北京)の環境科学與工程系においてコーディネーター会議が開催された。会議には日本側と中国側からコーディネーター、各グループリーダー、プログラMRIーダー、サブプログラムリーダーおよび事務職員が参加した。



会議の様子

会議では主に本事業の昨年度の交流実績と秋のセミナーを中心とした今年度の交流計画および本事業10年間を通じた成果となるテキストの出版に関して、活発な議論が行われた。また、両国のコーディネーターは今後も密接な関係を保ちつつ、最終年度(平成22年度)に向けて両国の研究者が活発に共同研究を推し進めていく意志を確認した。



黄霞清華大学教授、汪誠文同教授、王偉同教授、津野洋教授、他参加者
(大学院工学研究科)

第12回「高校生のための化学」を開催

化学研究所は、7月25日(土)に第12回「高校生のための化学～化学の最前線を聞く・見る・楽しむ会～」を開催した。身近にある「化学」を再発見し、普段は見ることのできない最先端科学の現場に触れることで、高校・中学生を中心とした若い世代に化学の楽しさを体験してもらうことを目的として毎年夏に開催している。

当日は、雨まじりのあいにくの天候にもかかわらず、全国各地から集まった約100名の参加者たちは、10の見学サイト(研究室)に分かれて、高強度レーザー装置などの大型研究機器を見学し、化学実験にも挑戦した。色のついた分子や良い匂いがする分子を作るサイトでは、原料を慎重に計量するところから、有機合成実験を体験した。また、極低温や超高压などの極限状況を紹介するサイトでは、超伝導現象の観察や高压合成などを体験し、そのユニークな世界を体感した。いずれのサイトでも、見慣れぬ装置や器具を使って、真剣な面持ちで実験に取り組むいき



真剣な面持ちで実験に取り組む参加者たち

いきとした高校・中学生の姿が見られた。

また、午前・午後と合計2カ所のサイトを見学した後、木質ホールにて「総合討論：なんでもきいてみよう」が行われ、化学研究所の教員や大学院生たちが、参加者からの質問や疑問に答え、活発な討論会となった。

(化学研究所)

教育実践コラボレーション・センター公開シンポジウム「日韓の教育改革の行方」を開催

2008年度の公開シンポジウム(「日中韓の教育課程・教育評価改革の動向」2008年7月31日開催)に引き続き、7月31日(金)、芝蘭会館別館にて、大学院教育学研究科教育実践コラボレーション・センター主催(共催：日中教育共同研究センター、グローバルCOE「心が活きる教育のための国際的拠点」)の公開シンポジウム「日韓の教育改革の行方」が開催された。

まず、矢野智司教育学研究科長による開会の挨拶が行われ、続いて韓国・ソウル大学教授の白淳根(ベク・スングン)氏より「韓国における教育改革の動向」について報告がなされた。韓国における初等・中等教育および大学教育の改革、そして国家的な課題として人材育成に取り組む新しい動きについて、具体的なプロジェクトの紹介をもとに報告がなされた。次に、文部科学省研究振興局長の磯田文雄氏より「日本における教育改革の動向」について報告がなされた。戦後日本の教育改革の流れが、その根底にある経済原理や社会システムとどのように結び付けられ、展開してきたのかについて報告された。そして今後日本の教育改革が進むべき方向性や論点が示された。最後に、教育学研究科の西岡加名恵准教授から「日本における教育評価改革の動向」が報告された。近々改訂される指導要録について、2008年3月に告示された新学習指導要領における「活用」の位置づけや、「関心・意欲・態度」や総合評定の在り方をめぐる検討や提案がなされた。

これら三氏の報告によって、それぞれの国の事情や歴史の違いはあるにしろ、韓国、日本における教育改革の動向は、同じ方向性を持つことが明らかとなった。とりわけ基礎教育の徹底、基礎学力の向上や教育の平等、教育格差の是正などが21世紀の教育改革の重要な課題として挙げられた。また、教育改革の動向を語るとき、経済との関係を視野に入れることの重要性についても、両国の改革で共通する点であった。

本シンポジウムには、教育関係の研究者、小、中、高等学校の現職の教員、大学院生、一般の方々など約70名が参加し、会場はほぼ満席状態となった。参加者が熱心に報告に耳を傾ける姿が見られ、各報告にも多くの質問が寄せられた。こうして、本シンポジウムは盛況のうちに幕を閉じた。



公開シンポジウムの様子

(大学院教育学研究科)

IDE 大学協会近畿支部 IDE 大学セミナーを開催

8月21日(金)、事務局を京都大学に置く IDE 大学協会(Institute for Development of Higher Education) 近畿支部主催で、「『学士力』を考える」をテーマに2009年度大学セミナーを開催した。

まず、近畿支部長である松本 紘総長から、国公私立大学が一堂に会するこの場で活発な議論を期待するという挨拶があった。

続いて、次の3人のパネラーによる話題提供が行われた。

- ・「学士課程教育を支える学生調査：学生の成長をどう測るか」 同志社大学社会学部 山田礼子教授
- ・「大学の学士教育に期待するもの」 三菱東京UFJ 銀行 丸森康史京都支社長



松本総長の挨拶

- ・「大学教育と付加価値－組織マネジメントの視点から－」 桜美林大学大学院大学アドミニストレーション研究科 船戸高樹教授

話題提供を受けて全体討議に入り、「学士力」の定義の多様性を示すように、予定の時間をオーバーしての活発な議論が展開された。

最後に懇親会が行われ、大西珠枝理事・副学長より、今回の議論をそれぞれの大学の教育に生かしてほしいという挨拶があり、参加者同士交流を深める様子があちらこちらで見られた。



セミナーの様子

(総務部)

日誌

2009.6.1 ～ 7.31

6月5日 財務委員会
 8日 役員会
 9日 大学評価委員会
 ♪ 部局長会議
 ♪ 全学情報セキュリティ委員会
 12日 学生部委員会
 16日 教育研究評議会
 ♪ 新入外国人留学生歓迎パーティー
 17日 国際交流委員会
 ♪ 大学記者クラブと総長、理事、副学長、監事との懇談会
 ♪ 創立記念行事音楽会
 19日 永年勤続者表彰式典
 22日 経営協議会
 ♪ 役員会
 ♪ 名誉教授懇談会
 23日 第7回記者クラブとの定例懇談会
 28日 環太平洋大学協会(APRU)第13回年次学長会議(30日まで)
 30日 環境・安全・衛生委員会

7月8日 中華人民共和国、鄭 祥林駐大阪総領事一行、総長他と意見交換
 9日 企画委員会
 14日 部局長会議
 15日 国際交流委員会
 21日 役員会
 22日 第8回記者クラブとの定例懇談会
 24日 財務委員会
 28日 企画委員会
 ♪ 部局長会議
 ♪ 教育研究評議会
 ♪ 役員会
 ♪ 保健衛生委員会
 ♪ 人権委員会
 31日 広報倫理講習会・広報担当者連絡会

訃報

このたびは、半田 肇^{はん だ はじめ} 名誉教授、森田司郎^{もり た しろう} 名誉教授、的場敏博^{まと ば としひろ} 法学研究科教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に各氏の略歴、業績等を紹介いたします。

半田 肇 名誉教授



半田 肇先生は、5月24日逝去された。享年86。

先生は、昭和21年9月京都帝国大学医学部を卒業、京都大学医学部助手、同講師、同助教授を経て、同40年2月教授に就任、以後21年余にわたり脳神経外科学の初代教授として同分野を担当する傍ら、同59年4月から2年間京都大学医学部附属病院長を併任、同61年3月に停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を授与された。退官後は労働福祉事業団浜松労災病院長、医療法人医仁会武田総合病院長を務められ、その間に厚生省難病対策審議委員会委員および財団法人日本医療機能評価機構幹事として全国の医療に貢献された。

学術分野において、脳神経外科的疾患全てに対する臨床に優れた業績を残され、特に脳血管障害や脳腫瘍に対する先進的治療を早期から導入し、その発

展に尽くされた。研究分野では京都大学内外との共同研究を多様に展開し、特に実験的脳動脈瘤誘発動物モデルを世界で最初に作成してその成因を流体力学的に解析された。学生や若手脳神経外科医の教育に常に熱心であり、著書多数である。日本脳神経外科学会評議員、日本脳神経外科学会認定医試験委員長、日本脳卒中学会、日本脈管学会、日本神経学会等の理事等を歴任し、それぞれの学会の運営と発展に貢献された。国外での脳神経外科学への貢献も多く、平成元年10月には第9回世界脳神経外科学会において本邦2人目の名誉賞を受賞されている。これら一連の教育研究功労等により、平成10年11月に勲二等瑞宝章を受章された。

なお、7月20日百周年時計台記念館百周年記念ホールにおいて半田 肇先生を偲ぶ会が執り行われ、全国から多数の参列者があった。

(大学院医学研究科)

森田 司郎 名誉教授



森田司郎先生は、6月25日に逝去された。享年75。

先生は、昭和8年10月23日兵庫県伊丹市生まれ、同32年3月京都大学工学部建築学科卒業、同34年3月工学研究科修士課程修了、(株)東畑建築事務所に勤務の後、同35年6月京都大学工学部助手に任用され、同36年4月講師、同40年1月助教授、同53年8月教授に昇任し、建築材料学講座を担当された。平成8年4月改組により環境地球工学専攻環境構成材料学講座に配置換となり、同9年3月停年退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

平成9年4月からは、(財)日本建築総合試験所常任理事・所長、同14年6月から理事長、同21年4月からは顧問となられた。平成17年に発覚した耐震偽

装問題に始まる一連の建築確認・検査や建築士資格などの改革が実施された変動期において、的確な舵取りにより、同試験所を導かれ、建築物の質の向上と安全性確保に尽力された。また、関連する業務に携わる設計者や技術者の質の向上、ひいては国民生活の向上に貢献された。

先生は、鉄筋コンクリート造建築物に関して、鉄筋とコンクリートの付着機構の解明とモデル化、柱梁接合部の破壊機構の解明と設計法の開発、さらには、コンクリート品質管理方法の開発と実用化を行うなど、建築構造学と建築材料学の発展に大いに寄与された。

このような業績に対して、昭和44年度日本建築学会賞(論文)、同55年度コンクリート工学協会論文賞、平成6年度セメント協会論文賞を受賞された。

(大学院工学研究科)

的場 敏博 法学研究科教授



的場敏博先生は、7月21日逝去された。享年59。

先生は、昭和49年京都大学法学部を卒業された後、法学研究科に入学、同54年同研究科博士課程政治学専攻を単位修得退学された。その後、同54年日本学術振興会奨励研究員を経て同55年より京都大学法学部助教授に就任され、平成2年には同教授に昇任された。同4年大学院重点化に伴い法学研究科教授となり、同20年には公共政策連携研究部教授(法学研究科併任)に配置換え、同21年6月に法学研究科に配置換えとなった。

先生は、政治学とりわけ政党研究の第一人者として、多数の先駆的な研究を行い、この分野の発展に大いに貢献された。とくに、平成15年に刊行された『現代政党システムの変容』(有斐閣)において、日本をふくむ先進17カ国の政党データを用いた国際比較

を行い、1990年代の政党システムの変容を分析した業績は、わが国の政党研究の水準を向上させたものとして高く学界でも評価されている。なお、先生はこの論文で京都大学博士(法学)を授与された。先生はさらに、戦後日本の政党政治の歴史的再整理に取り組まれていた。そこでの焦点は、1990年代から現在までの政党政治の特徴を浮き彫りにすることに置かれていた。こうした研究は『戦後日本政党政治史論(仮題)』としてまとまりつつあり、公刊が待たれていたなかでのご逝去であった。

先生は日本政治学会事務局担当理事をつとめられるなど、学会活動にも多大なる寄与をされた。さらに、先生の実直なお人柄と真摯な学究態度は同僚教員や学生に広く知られるところであり、尊敬を集めていた。教育においては、優れた講義や著作を通じて、学部・研究科で多数の学生の指導を行われ、有為な人材の育成に尽力された。

(大学院法学研究科)

公開講座

平成21年度京都大学森林科学公開講座 (生存圏研究所・大学院農学研究科森林科学専攻 共催)

1. 日 時：10月31日(土)・11月1日(日)
2. 場 所：京都大学宇治おうばくプラザ きはだホール(宇治キャンパスに今秋オープン)
3. プログラム：
 - 講演(10月31日(土))

次世代の森の恵み－バイオ燃料から工業原料まで－	梅澤 俊明
木の肌、木の艶	奥村 正悟
森といかにつきあうか－これからの森林資源利用－	長谷川尚史
樹木を支える細胞	栗野 達也
電磁波を用いた地球大気環境計測	古本 淳一
 - 見学・実習(11月1日(日))
 - コース1：木材を使って電波を知ろう(プラザセミナー室・マイクロ波エネルギー送受電実験棟)
 - コース2：宇治十帖を歩く、源氏物語の民族植物学(宇治市内散策)
 - コース3：家を支える木組みのチカラ－伝統技術に学ぶ現代の家造り－(木質ホール・ECO住宅)
4. 受 講 料：5,000円(1日のみ3,000円)
5. 申 込 締 切：10月10日(土)必着

6. 申込方法：氏名・郵便番号・住所・電話番号・返信先・希望実習コース名（1日のみの参加の場合はその旨）を明記の上、以下のいずれかの方法により、公開講座係へ申し込んでください。

① E-mail：forest-kokai2009@rish.kyoto-u.ac.jp

② FAX：0774-38-3600

③往復はがき：返信先を明記の上、〒611-0011 宇治市五ヶ庄 京都大学生存圏研究所
公開講座係宛

※詳細は、ホームページをご覧ください。

公開講座 HP <http://www.rish.kyoto-u.ac.jp/events/forest2009/>

生存圏研究所 HP <http://www.rish.kyoto-u.ac.jp/>

教育学研究科附属臨床教育実践研究センター公開講座「拒食症と現代のライフスタイル」

1. 日 時：11月3日(火・祝)13:00～17:00

2. 場 所：京都テルサ 第一会議室(西館3階) 京都駅(八条口西口)から南へ徒歩約10分

3. 講 師：ドーリス・リエ(客員教授)

河合俊雄(こころの未来研究センター教授)

4. 対 象：市民一般、心理臨床専門家、教育関係者

5. 受 講 料：2,500円

6. 定 員：60名(先着順)

7. 申込締切：10月2日(金)

8. 問 合 せ 先：京都大学教育学研究科附属臨床教育実践研究センター

TEL：075-753-3052

申込方法等詳細については、教育学研究科ホームページ(公開講座)をご覧ください。

<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/event/index.html#koukaikouza09>

(大学院教育学研究科)

お知らせ

無料法律相談のお知らせ

—10月実施分について申し込みを受付中—

法科大学院では、授業の一環として行う法律相談実務演習(リーガル・クリニック)において、無料法律相談を実施しております。

この無料法律相談は、日常生活の中で生じるさまざまな法律問題について、弁護士の立会いと指導のもと、既に法律知識を習得している法科大学院3年次の学生が市民の方々からのご相談に乗り、必要な助言を行うものです(秘密は厳守いたします)。

現在、10月実施分について申し込みを受付中です。

(実施日)10月1日(木)、5日(月)、7日(水)、13日(火)、16日(金)、22日(木)、29日(木)

11月以降の実施等、詳細は法科大学院ホームページをご覧ください。

<http://lawschool.law.kyoto-u.ac.jp/kusunoki.html>

問合せ先：京都大学法科大学院 リーガル・クリニック担当

TEL：075-753-3262 FAX：075-753-3129(午前10時～午後5時／土日祝休)

(法科大学院)

隔地施設 紹介



信楽MU観測所全景



信楽MU観測所観測棟



MUレーダー観測強化システム

生存圏研究所信楽 MU 観測所

(<http://www.rish.kyoto-u.ac.jp/mu>)

生存圏研究所信楽 MU 観測所(以下、信楽 MU 観測所)は、滋賀県甲賀市信楽町の国有林内に位置しています。観測装置の中核をなす MU(Middle and Upper atmosphere)レーダーは、直径約100mの大型円形アンテナアレイを備えた大出力 VHF 帯レーダーであり、1984(昭和59)年に完成しました。MU レーダーは、各アンテナ素子に取り付けた合計475個の小型半導体送受信機を計算機で制御することで、高速ビーム走査やアンテナアレイの柔軟な分割使用が可能です。レーダー制御を計算機で設定できる柔軟なシステムをもつ世界で最も高性能な大気レーダーとして世界に知られています。

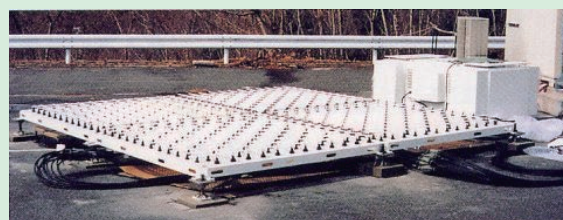
MU レーダーは、1992(平成4)年に実時間データ処理システム、1996(平成8)年に高速並列レーダー制御システムが導入されて機能向上が行われてきました。さらに2003(平成15)年には MU レーダー観測強化システムが導入され、これを構成する超多チャンネルデジタル受信機により空間領域および周波数領域のレーダーイメージング観測が可能となりました。MU レーダーの新システムを活用することで、新たな観測方法の開発と観測データの解析による地球大気科学の理解への貢献が期待されています。

7.6haの敷地を持つ信楽 MU 観測所は、MU レーダーに加え多数の観測装置が設置されて共同利用に供されています。たとえば電離層観測用のアイオノゾンデは、HF 帯の電波を周波数を走査しながら発射し、電離層からの反射波を受信して電子密度分布を測定します。また、ラジオゾンデ受信機は、小型の気球に電波発信機のついた観測装置を取り付けて放球し、観測データを地上で受信することで大気状態(気圧、気温、湿度、風速、風向)の鉛直分布を測定します。さらに自動地上気象観測装置による地上の気圧・気温・湿度・風向・風速・降雨量の同時測定も可能です。

MU レーダーの観測範囲外である高度1.5km以下の観測をカバーする小型の L 帯境界層レーダー(LTR)が信楽 MU 観測所において産学協同で開発され、MU レーダーとの協同観測で広い高度範囲の観測が可能となっています。LTR は、気象庁の現業ウインドプロファイラシステムに採用されて全国31カ所に展開され、得られたリアルタイムデータは、気象数値予報モデルの精度



MU レーダーアンテナ

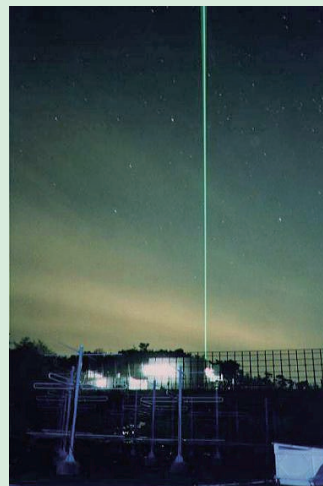


L 帯境界層レーダー(LTR)

向上に活用されています。さらに音波と電波を組み合わせることで気温を観測する RASS(Radio Acoustic Sounding System)用音波発射装置などの観測装置が集まっており、国内外に知られる有数の大気観測拠点となっています。

また、1999(平成11)年には中層大気および下部熱圏の観測体制を強化するため、光を用いる大型レイリー・ラマンライダー装置と下部熱圏プロファイラレーダー(LTPR)から成るレーダー・ライダー複合計測システムが信楽 MU 観測所に導入されました。ライダー装置は、MU レーダーの感度が低下する成層圏中部～上部の観測を補完するだけでなく、同時に対流圏内の水蒸気分布も同時に得ることが可能です。

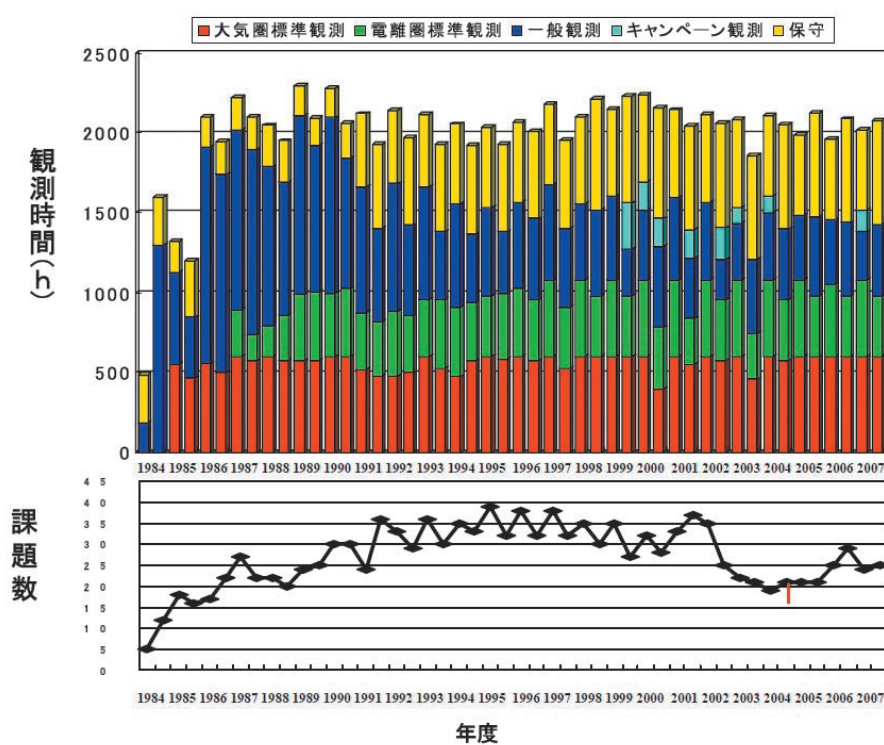
MU レーダー全国国際共同利用の公募は年 2 回行われ、MU レーダー全国国際共同利用専門委員会により審査されて観測スケジュールが決定されます。近年、共同利用が国際化され、2 名の国際委員を迎えて国際共同利用実施の議論を行っています。



大型レイリー・ラマンライダー

2006(平成18)年度後期に 2 件の課題で開始された国際共同利用は、2008(平成20)年度には 7 件まで拡大しています。MU レーダーの運用時間は、年間約 3,000 時間以上ですが、MU レーダーの新システムを有効利用するため、2008(平成20)年には総観測時間の約 60% を占めていた大気圏標準、電離圏標準観測モードの割り当て時間を見直し、長時間のキャンペーン観測にも柔軟に割り当てるようにしました。

信楽 MU 観測所には研修室や宿泊施設も整備されており、共同利用者による測定機器等の持ち込みや研究集会も行われています。研修室にはビデオ会議システムが導入されて遠隔会議も可能となり、近年宿泊室にはインターネ



MU レーダー観測共同利用の観測時間及び課題数の年次推移



研修室



宿泊室

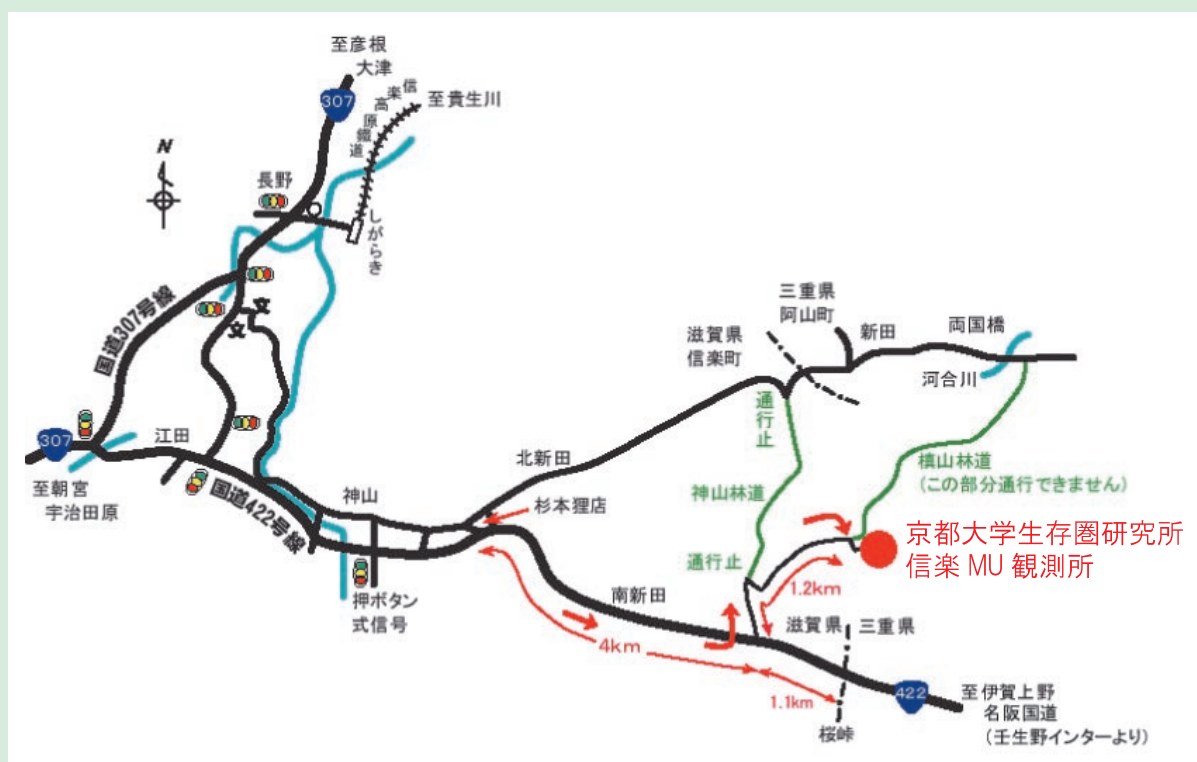
ット設備が導入されるなど共同利用者の利便性も向上させる情報通信設備の整備も進んでいます。

MU レーダー観測データベースは、生存圏データベース共同利用に統合運用されて公開されています。研究所事業として行っている標準観測については、観測後直ちに、その他の観測については、1年を経過したデータを共同利用に供しています。

信楽は、日本六古窯に数えられる信楽焼の産地であり町内には多くの窯が残っています。信楽名物の狸の置物が出迎える信楽の陶器店で器を眺める際には、信楽 MU 観測所まで足を伸ばし、大気や電離層の振舞いに思いを馳せていただけると幸いです(見学は随時受付。事前連絡必要)。



信楽焼たぬき



信楽 MU 観測所への経路図

連絡先

〒529-1812 滋賀県甲賀市信楽町字神山
TEL : 0748-82-3211 FAX : 0748-82-3217
E-mail : mu@rish.kyoto-u.ac.jp

職員構成

教員 1 名, 事務職員 2 名

アクセス

J R 京都駅—(J R 草津, J R 貴生川経由)—信楽高原鐵道信楽駅下車(約 2 時間), 信楽高原鐵道信楽駅から約 12km(車で約 15 分)
または、京都大学宇治キャンパスから約 40km(車で約 50 分)